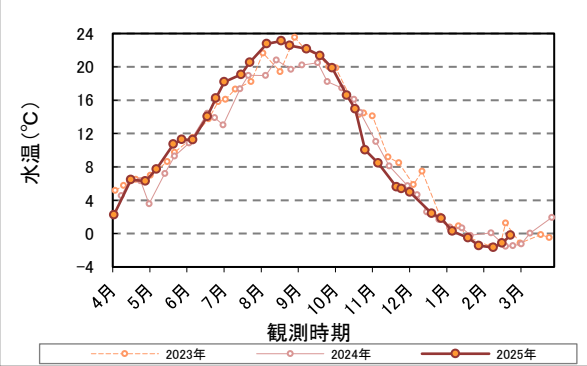


◎オホーツクタワーの動物プランクトン分析速報 (2026年2月)

※海洋観測：紋別市、動物プランクトン分析：(株)エコニクス

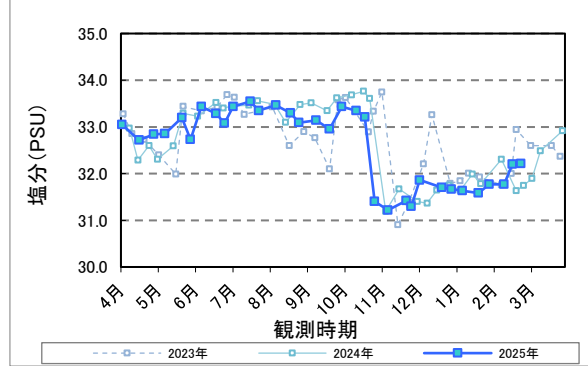
海洋環境データ

◎水温

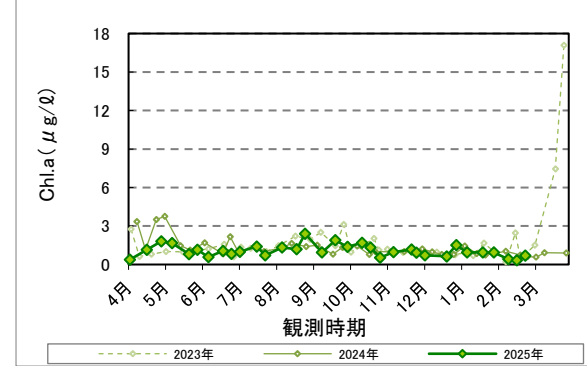


※水温、塩分、Chl. aは0~9mまでの平均値である。  
※2026年1月25日：流水初日、2月2日：流水接岸初日 発表

◎塩分



◎Chl. a



出現量の多かった種類



・Acartia longiremis ◆  
(カイアシ類：アcartia-ロングレミス)  
体長：♀1.0-1.4mm、♂0.9-1.2mm。世界各地の冷水域沿岸に分布し、日本では東北から北海道沿岸で出現する。



・Pseudocalanus minutus ◆  
(カイアシ類：シュウド カラス-マイス-クス)  
体長：♀1.4-2.1mm、♂1.1-1.6mm。北半球の亜寒帯・寒帯および北太平洋温帯寒流域に分布する。日本周辺では親潮流域に分布し、山陰沖からも報告されている。



・Pseudocalanus newmani ◆  
(カイアシ類：シュウド カラス-ニューマニ)  
体長：♀0.9-1.5mm、♂0.8-1.2mm。北半球の亜寒帯・寒帯および北太平洋温帯寒流域に分布する。東北以北の沿岸では冬季最優占カイアシ類の1種となる。



・Oithona similis  
(カイアシ類：オithona-シムリス)  
体長：♀0.7-1.0mm、♂0.6-0.7mm。日本では各地の内湾、沿岸、外洋で普通に出現する。各大洋に広く多く分布するが、比較的冷水を好み、外洋より沿岸に多い。



・Copepoda (nauplius)  
(カイアシ類のノーゾ リウス幼生)  
カイアシ類の発生途中の幼生。脱皮を繰り返して複数の発生段階を経て成体になる。海産魚類の仔魚生餌には餌としてのカイアシ類のノーゾリウス幼生密度が決定的といわれている。

概要

Table with 3 columns for dates 2月9日, 2月16日, and 2月23日. Rows include average temperature, salinity, Chl. a, sedimentation, and species lists for NORPAC and North-style quantitative nets.

※海洋環境データ欄の水温、塩分、Chl. aのグラフは、水深0~9mまでの平均値をプロットしたものである。平均水温、平均塩分、平均Chl. a欄の数値は、表示の都合上、水深0~9mまでの平均値を小数第2位で四捨五入した値で示し、グラフ上の表示と異なる場合がある。

※種名の先頭に“◎”がつく種類は、出現量の多い種類を示す。[ ]内の“+”はサンプル中の個体数の多さが後述の程度であると判断し、区分したグループである([+]出現、[+]やや多い、[+]多い、[+]かなり多い、[+]極めて多い)。

※種名の後ろの記号は、分析者の経験から北海道における出現傾向に後述の特徴があると判断し、区分したグループである(◆冷水性種、●暖水性種、■汽水性種)。

※2月のサンプルには腐植質(主に枯死・分解した植物由来の物質)が多く含まれており、沈殿量の数値はこれを含む。

※参考文献：

List of scientific references including works by 千原・村野 (1997), Wilson (1966), Pinchuk et al. (2006), 林 (2006), 西・加藤 (2002), 古賀 (1960), 大越・野村 (1990), and 大塚・上田・岩淵 et al. (2007).